聖書日課

みちのひかり

2025

12月

今月の聖句

「しかし、私は主を仰ぎ見
わが救いの神を待つ」
ミカ書　第7章7節

八王子キリスト教会

12月1日（月） ヨナ書　第2章

空しい偶像に頼る者たちは
慈しみの心を捨てている。(9)

神に反抗して嵐に遭い、海に投げ込まれることになった預言者ヨナですが、神は巨大な魚を備え、その腹の中で守られます。そこで、ヨナは悔い改めます。しかしながら、ヨナ書は全体を通して、彼の悔い改めには段階があると語っています。その第一段階は懺悔です。不従順にもかかわらず、神の慈しみによる守りが備えられ、自分の命が神によるものであることを知り、神の慈しみを賛美します。しかし、話はここで終わっていないことが大切です。悔い改めにはもう一段階が必要なのだと語ります。

ヨナは神の慈しみによって自分の不従順が赦されたことを感謝できても、「空しい偶像に頼る」(9)ニネベの人の不従順の赦しを心底祈ることがまだできません。ネタバレのようですが、最後までヨナは、「主よ、申し訳ありませんでした。あなたの慈しみの果てしなさがよく分かりました」とは書かれません。ヨナには理解できない、神の惜しむ愛で話は終わります(11)。

肝心なのはそこです。悔い改めの原意は、《帰ること》です。何度でも神の愛に帰ることです。帰るとは、ふり返ることです。ヨナが預言者として立つためには、大魚の腹で知った神の慈しみが、彼の目には敵と見える人々にも届いていることをくり返し知らねばなりません。

主よ、不従順な私が赦されたように、他者の不従順も赦されるのがよく分かりますように。

12月2日（火） ヨナ書　第3章

神は思い直され、その燃える怒りを収めて、我々は滅びを免れるかもしれない。(9)

ヨナは、再度ニネベ宣教に向かいますが、悪の街に対する神の憐れみが腑に落ちていません。ですから「あと四十日で、ニネベは滅びる」(4) と、短く滅びだけを告げる奇妙な伝道説教をします。嫌々語る預言者ヨナの顔が見えてくるようです。

ところが、このまったく出来の悪い伝道説教が、どういうわけかニネベに一大リバイバルを巻き起こし、王までが真剣に悔い改めます。人間の言葉の巧みさを越えて、神が宣教しておられるのを見る思いがします。なぜ、こんなにも素直に、あの悪の街ニネベが受け入れたかと言えば、ヨナの宣教の言葉によって、苦しみの原因が自らの悪であることを知ったからでしょう。ニネベもまた神に造られたものなのですから、神が備えてくださる生き方を失えば、混乱と苦しみに立ち尽くすほかないのです。

ニネベの王は「神は思い直され、その燃える怒りを収めて、我々は滅びを免れるかもしれない」(9) と言いますが、私たちはもっとはっきり、「一人も滅びないで」（ヨハ 3:16）という神の御心をキリストによって知らされています。

主よ、あなたの救いの御心に私たちの心をも、開きあなたの救いを受け入れます。

12月3日（水） ヨナ書　第4章

それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。（11）

悪の街ニネベが救われてしまって、ヨナはやり場のない不愉快な心に捕らわれています。「恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを…思い直される方」(2)と自分に対する御心を知りつつ、他の人が憐れまれることが許せません。神の御心を不愉快に感じ死んだ方がましだとまで言います。ヨナの頑固さは笑って済まされません。頑固な敵意は私たちの問題でもあります。

聖書の描く神は私たちの予想を裏切ります。神は「お前は、預言者だろう！そんな心を持つなんてとんでもない！」とお捨てにはならず、ご自身の《惜しむ心》を何としてもヨナに分かち与えようとなさいます。「恵みと憐れみに満ちた神」とヨナが見抜いた以上に、神は恵みを憐れみの方です。涼やかな日陰を与えたとうごまの木一本が枯れたことを死ぬほど惜しむヨナに「それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから」(12)と、静かにやさしく諭されます。

傲慢に賢さを自負して世界を裁く私たちに、造り主であり給う神は、改めて「私は惜しむ」と言い給うのです。

主よ、あなたのもとにつなぎ止め、あなたの憐れみを教え続けてください。

12月4日（木） ミカ書　第1章

ラキシュは娘シオンの罪の始まり
イスラエルの背きの罪はあなたの中に見いだされる。（13）

預言者ミカは、イザヤと同時代人です。宮廷の公認の預言者だったイザヤに対し、ミカは、一介の農夫､つまりアマチュアの預言者でした。5 節でサマリアとエルサレムの両方が出てくるように、ミカは両王国で活動しました。彼が小さな村の農夫だったからこそ、都市の生活の偏りや腐敗がよくわかったのでしょう。二つの国は存在していましたが、それは表面上のことです。彼は、神への背信によってすでに崩壊し始めていると警鐘を鳴らし、サマリアは瓦礫の山に、ぶどうを植える所（6、人が住まない所の意）になると告げます。預言者ミカは、ジャッカルや鷲みみずく鳴き声のように、人々に届くことのない神の言葉を抱え、泣き叫びつつ預言しています。

イスラエルの要塞都市「ラキシュ」（13）から破綻が始まります。立派な砦で守っているようでも、その内側に「罪の始まり」(13)が生じています。この「罪の始まり」とは、エジプトからの異教の祭儀が、この砦の町に入り込んだことだと解説する人があります。滅びは、外からではなく、内側から、すなわち、神への畏れを喪失するところから始まると言われています。

主よ、この世界や、私たちの住んでいる町を深く見るまなざしを養わせてください。主を畏れ、本当の救いにこそ目を注がせてください。

12月5日（金） ミカ書　第2章

私の言葉はまっすぐ歩む者に
良いことをもたらさないだろうか。（7）

権力者が床の中で悪を企み、朝の光の中でそれを行うと言われています(1)。床の中とは、密かに腹に抱える欲望を走らせるところです。権力者が腹に欲望を抱えることの困った事情は、彼らは朝を迎えると、町でその権威を振り回せることです。そのようにして、自分の腹の底の願望どおりに自分の国ができていきます（1)。人々は家や土地を収奪され（2)、その嘆きの歌が街角に響きます（4)。

ところが、当の権力者たちは預言者がそう語るのを「たわごと」(6）として片付けます。「主は気短な方で、これがその業なのか」(7）とは、一見、真理は時間をかけても現れるという知恵のようにも聞こえます。けれども、もっともらしいことを言って対応を先送りし、神の義と裁きを遠くに置いてしまいます。

それに対し、主は「私の言葉はまっすぐ歩む者に／良いことをもたらさないだろうか」（7）と言われます。「すべて真実なこと…尊いこと…正しいこと…清いこと…愛すべきこと…評判のよいこと…徳や称賛に値すること…を心に留めなさい」（フィリ 4：8)。素朴に素敵と感じることは、屁理屈よりもずっと真実の答えに近いのです。

主よ、あなたの言葉にまっすぐに歩むときに、喜びも平安も備えてくださることを感謝します。

12月6日（土） ミカ書　第3章

しかし、私は主の霊による力／公正と勇気に満たされ／ヤコブにその背きを／イスラエルにその罪を告げる。(8)

イスラエルに横行した、とくに支配者たちの罪について語られています。手にしている力によって、弱い人たちを食い物にしたということが言われます(2-4)。支配者に付与される権威は、弱い者を救うために公正に行使されるべきものです。弱い者がその社会の中でどう扱われているかは、その社会の公正さの指標です。

支配階層に、宮廷に出入りするような預言者が数えられています。彼らの預言のエネルギーは「歯で何かを噛んでいる」(5)こと、すなわち自分の利益への執着です。自分たちの損得を巡る戦いです。預言者らしい神の言葉を語る戦いは、もはやそこにはありません。

本来、預言者は、暗い「夜」にこそ希望の「幻」を語るべきですが、利益も心地よさも喪失する夜に、幻を語る言葉をも失うのです(6)。暗ければ暗い、苦しければ苦しい、と現状を嘆くだけです。一方、「主の霊による力」(8)よって立つミカは、夜に逆らう力を持ちます。災いの中でも公正と勇気によって語り続ける言葉を語り、絶望の中でなお希望を語ります。神から言葉を預かる預言者とは、そういう存在です。

主よ、暗い現実に逆らう、希望の言葉、救いの幻に支えられる言葉、霊の言葉をください。

12月7日（日） ミカ書　第4章

彼らはその剣を鋤に／その槍を鎌に打ち直す。／国は国に向かって剣を上げず／もはや戦いを学ぶことはない。(3)

前章と対照的に、終わりの日にまことの王の支配が打ち立てられると語られます。多くの国民が主の道を求め、主の山にやってくると告げられます(1,2)。しかもそれは、剣や槍に追われて集められるのではありません。「彼らはその剣を鋤に／その槍を鎌に打ち直す。／国は国に向かって剣を上げず／もはや戦いを学ぶことはない」と語られるとおり、終わりの日には武力はもはや力を持ちません。

平和は全世界の願いですが、民族間の憎悪や自国の利益が投げ込まれると、平和はたちまち遠のきます。平和を第一の願いとすることが人間にとってどんなに難しいでしょうか。

けれども、本当に平和を願っておられるのは、神です。「羊の群れの塔」(8)とは、羊飼いがそこに立ち、群れを見張るためのものです。そこに真の羊飼いとして神がお立ちくださいます。その羊飼いの王権は、足の萎えた者、追いやられた者、災いに遭わせられた者を呼び集め、一つの国民とするというもので、人々をやさしく導きます(6, 7)。今の世界にないものはこれで、しかも世界が求めているものもこれです。主イエスはこの王として、メシアとして来てくださいました。

主よ、優しい羊飼いたる王の支配を感謝いたします。この支配こそ、永続するものだと心から信じます。

12月8日（月） ミカ書　第5章

エフラタのベツレヘムよ／あなたはユダの氏族の中では最も小さな者。／あなたから、私のために／イスラエルを治める者が出る。（1）

「エフラタのベツレヘムよ／あなたはユダの氏族の中では最も小さな者。／あなたから、私のために／イスラエルを治める者が出る」は、マタイ福音書がメシア預言として引用するもので、クリスマスによく読まれます。改めてミカの文脈で読んでみると、敵軍の包囲の中で(4：14)、民の最も小さな者から救いがやってくると語られていることがわかります。たしかに主イエスはメシアとして、小さな氏族の、しかも神以外に何の支えも持たない赤ん坊として来られました。

こうした天に由来する神の救いについて、「ヤコブの残りの者は…主から降りる朝露、草の上に降る雨のようだ。／彼らは人に望みを置かず／人の子らを待つことはしない。」(6)と語られています。その残りの小さな者が、天の強い力を持つからこそ、「獅子…若獅子」(7)と言われています。この力による救いは、神に信頼して軍馬、戦車、偶像を打ち砕くことで備えられます。そうすると、神への信頼を抜きにすれば、まわりに押しつぶされるのではないかと人をおびえさせるほどの小ささです。その小ささにこそ、天来の救いがやってきているとミカは告げます。

主よ、すべてが壊れていくように見える中でも、神の力強い救いが動き続けていることを信じます。

12月9日（火）　ミカ書　第6章

人よ、何が善であるのか。…
それは公正を行い、慈しみを愛し／へりくだって、あなたの神と共に歩むことである(8)

「わが民よ／私はあなたに何をしたというのか。／何をもって、あなたを疲れさせたのか。／私に答えよ」(3)と、主が問われる「疲れ」とは、神に従う疲れ、律法を守り行う疲れでしょう。本当は誤りなき正しい律法なのに、人の方が勝手に疲れて、そう求める神の方が間違っていると感じるのです。神は御自身の民への愛を数えさせなさいます。奴隷の地エジプトからの救出なさいました(4)。またユーフラテスの呪術師バラムすら、三度にわたってイスラエルを祝福しました(5)。この時は、神の祝福にもかかわらず、彼らはモアブのいかがわしい宗教を自分たちに引きずり込んでしまいます。その結果、彼らは人身供犠すら行う始末です。明々白々の自分たちの誤りにもかかわらず、自分たちを善だと考えました。

その彼らに改めて「人よ、何が善であるのか。／そして、主は何をあなたに求めておられるか。／それは公正を行い、慈しみを愛し／へりくだって、あなたの神と共に歩むことである」と、主がお考えの善が告げられます。神と共に歩むことは、公正と慈しみによって隣人を愛することに他なりません。神への愛と隣人への愛は、切り離すことができないのです。

主よ、出会う一人一人を偏り見ず、愛しつつ生きることができますように。

12月10日（水）　ミカ書　第7章

しかし、私は主を仰ぎ見
わが救いの神を待つ。(7)

神がその民のうちに、忠実さや正しさという実りを求められますが、見つかりません(2)。「高官と裁判官でさえ報酬を要求する」(3)ほどに、実はひどく失われています。有力者の欲のままの発言によって裁きは容易にゆがめられます。「彼らの中の最も善い者も茨のようであり／最も正しい者も茨の垣のようだ」(4)と言われるように、善や正義を神以外の何かと比較していると、結局自分の悪に傾いていきます。

そうすると、みんな自分の事しか考えていないと思い、家族同士でも友人同士でも信頼関係を失ってしまいます(5，6)。だからこそ、預言者はまっしぐらに天を見上げ「私は主を仰ぎ見／わが救いの神を待つ」(7)と言います。天にこそ、規範としての忠実さや正しさがあり、それが私たちを善へと引っ張ります。

尽きぬ天の光を見上げてこそ、闇の中に座る勇気がやってきます(8)。神の光を人間が消すことはできないからです。「主は私を光に導き／私は主の正義を見るだろう」(9)と言うとおりです。預言者は、神の慈しみ、憐れみをその怒りよりも大きく確かなものとして信じているのです(18，19)。慈しみと憐れみを与え給うのが神ならば、世界がそれらを捨て去ってしまうことはできないのです。

主よ、あなたを仰ぎ見、私の救いであるあなたを待ちます。

12月11日（木）　ナホム書　第1章

「いかに彼らが力に満ち、数が多くとも／必ず切り倒され、消えうせる。／私はあなたを苦しめたが／二度と苦しめることはない。（12）

ニネベはティグリス川東岸のアッシリアの首都です。ナホムが誰であり、エルコシュ(1)がどこであるかはわかりませんが、アッシリアの支配が過ぎ去ることが言われているので、エレミヤなどと同時代人ということになるでしょう。かつてヨナが宣教した街ニネベは、今やその滅びが告げられます。ヨナの宣教で悔い改めたニネベは、以後悔い改めに生き続けなかったのでしょう。信仰とは、自分の状態の一時的な善悪の判断ではなく、継続的に神に振り返り続け、神を呼び続けることだということを改めて思います。

アッシリアによる北イスラエル王国の滅亡は、同じように自分たちも滅びるというユダの暗い予想となりました。それで「苦しみは二度と起こることはない…私はあなたを二度と苦しめることはない」(9，12)と告げられています。「二度と」とは、きっと二度目の滅びは自分たちにやって来るという恐れに対しての預言です。ユダもやがてバビロンに滅ぼされますが、一括りに「やっぱりすべては滅びる」と言うのは早計です。人間は点と点をつないで暗い未来を思いやすいのですが、神は救いのためにつなぎ合わせ、つなぎ直されるのです。

主よ、自分の悲観的な予測から救い出してください。摂理の神を大きく信じます。

12月12日(金)　ナホム書　第2章

良い知らせを伝え
平和を告げる者の足が山の上を行く。(1)

良い知らせと平和を告げる者の足が山の上を行くと言われる時の、「山」は見上げるばかりのどうにもならない困難の山ということでしょう。山に人間の目は奪われ、良い知らせも平和ももうやって来ないと思い込んでしまうのですが、しかし、平和を告げる者の足はその山の上を軽々と越えて喜びを告げ続けると言われます。

しかしながら、4 節以降のアッシリアに対するバビロンの侵攻と殺戮の描写は、読みながら身震いを覚えるほどです。けれども、残虐極まりない戦いのはてに「獅子は子獅子のために十分な獲物を引き裂き／雌獅子のために絞め殺し／獲物で洞穴を／引き裂いた肉で住みかを満たした」(13)と、獅子しか残らなかったと言われます。みんなが獅子になったときに、それがどんなに恐怖と絶望に満ちた世界になることでしょう。今すでにこの世界が、皆が強くなることに夢中になり、弱さへのまなざしを失った獅子の世界になっているのかもしれません。

しかし、そうなり果てることに神が立ち向かわれます(14)。力や強さをもって世界を治めることは、自分の薄暗い洞穴を獲物で満たすことにしかならず、決して世界を豊かに造り上げていくものとはならないのです。

主よ、自分の狭い洞穴にため込むような生き方から、福音によって私を救い出してください。

12月13日（土）　ナホム書　第3章

あなたを守る部隊はばったのようで／指揮官たちはばったの群れのようだ。…太陽が昇ると飛び去り／どこへ行くのか誰も知らない。（17）

「テーベは捕らえられ」(10)のテーベは、覇権は永遠とさえ思われたエジプトの一都市（現在のルクソール）です。そのテーベをアッシリアは占領したのです。紀元前 664 年のことです。この占領者アッシリアが滅ぶのが紀元前 612 年ですから、アッシリアの覇権は 52 年間です。ナホムはその様子を見ていたと考えられます。「揺さぶれば、食べる者の口に実が落ちる」(12)は、滅びるテーベではなくニネベの爛熟（熟し腐敗が始まる）を言います。圧倒的で派手な軍事力が何かをつくり出しているようでも、実は崩壊が足もとにまで来ているのです。

ニネベの商人が「ばったの群れ」(16)のように、空の星の数より多くなったと言われますが、羽を持ったばったですから、数は多くともたちまち飛び去るというのです。また、防衛部隊も指揮官も飛び去る「ばった」(17)だ言われます。いずれも無常観を語るものです。

有為転変の世で、神にカウントされるのは、強さでも賢さでもなく、神への悔い改めです。悔い改めとは、単なる懺悔ではなく、神に帰ることです。こうして造られる永遠者との関わりこそ、変わることのない確かなものです。

主よ、ばったを集めて喜ぶような、儚いものに目を奪われることがありませんように。永遠に揺るぎないあなたをこそ仰ぎます。

12月14日（日）　ハバクク書　第1章

「暴虐だ」とあなたに叫んでいるのに
あなたは救ってくださらない。(2)

　これまでの多くの預言者は民を告発しますが、ハバククは神を告発する預言者と言われます。6 節のカルデヤ人はバビロンのことで、残虐な力を強めていく様子が書かれています。時代的には、ユダ滅亡の二代前の王ヨヤキムがバビロン王に連行された頃だと考えられています。その時代にあって、神に助けを求めても救われず、暴虐が許されるのはなぜかと預言者は神に問い迫ります。けれども、大切なのは、神は存在するのかと自分で問うのではなく、神御自身に謎をぶつける点です。

　そこで、神はカルデヤ人によって一つの業が行われるとお答えになります(5)。しかも、イスラエルの暴虐に勝るような残虐行為によって成されると告げられるのです(6-11)。それでも預言者は承服しません。「あなたは、わが神、わが聖なる方／不死なる方ではありませんか」と問います。殺戮をもって業を成すのは神のなさることでしょうか(12)、しかも、カルデア人に比べれば他はまだましなのに(13)…と迫ります。カルデア人が「引き網…投網…に香を焚く」(16)とは、自分たちの殺戮の成功を神の御利益によると誇ることで、そんなことがあってよいのかと、ハバククは問います。私たちの問いもこれと重なるのではないでしょうか。

　主よ、あなたに問わせてください。あなたを疑う、枯れた祈りから私を守ってください。

12月15日（月）　ハバクク書　第2章

見よ、高慢な者を。／その心は正しくない。／しかし、正しき人はその信仰によって生きる。（4）

カルデア人の暴虐を許すあなたはそれでも正しいのですか、と神に問うたハバククは見張り場で、自分の問いがどう扱われるのかを見ようとします(1)。そこで、主からの答えがあります。高慢な者には滅びの定めがあること、そして神を待ち望む信仰によってこそ生きられることが告げられます。「一目で分かるように」(2)は、直訳すれば「それを読む者が走るために」で、走りながらも読むことができるように、という意味合いです。バビロン侵攻で逃げ出す人々が、逃げながらでも、《高慢な人々は滅びる、神を待つものが生きる》という真理を忘れないように、ということです。高慢な者は滅びるというのは、緊急事態にも揺るぎなく存在し続ける真理なのです。

高慢はむしろ滅びを自らに積みます(6)。略奪は他からの略奪を生み、一歩下がってみれば、報復の連鎖が続くだけで、本（もと）を正せば、とめどない欲望が報復の連鎖の引き金を引いているのです。人間の欲望は、陰府の引力のようにすべてを自分に引き寄せるのです(5)。暴虐は、終わりの時のしるしで、敵への勝利の雄叫びすら、実は崖っぷちに立つしるしなのです(3)。

主よ、私が逃げながらでも揺るがない、一目瞭然の真理にこそ目を留めさせてください。

12月16日（火）　ハバクク書　第3章

それでも、私は主にあって喜び
わが救いの神に喜び躍る。（18）

　ハバククは、自分の問いに答えてくださった神に対して、さらなる問いではなく歌によって答えます。「シグヨノト」(1)は、詩編第 7 編の表題にも見られ、おそらくは曲のことと思われます。「迷う」という意味です。どんな曲だったのでしょうか。ハバククの神への問いに対しては、彼がすっかり納得してしまえるような答えではなかったのでしょう。病は残ります(5)。天変地異も生じます(6-11)。ハバククにとっては、それはやはり神の憤りと思えてしまうのです。しかし、その上で、迷いつつも歌っています。祈っています。神が生きておられることを知っています。根底にご自分の民を救う神の働きがあると信頼し、カルデア人の攻撃が止む日を「静かに待とう」(16)と言います。

　「それでも私は主にあって喜び、わが救いの神に喜び踊る」(18)は、信仰による聖なる飛躍です。世の中で言われる不幸を神の呪いに結びつける因果を越え、それでも神の救いを信じています。呪いを想起させる悲惨な出来事の谷間で、迷いながらも祈りつつ歌うとき、悲惨の谷に滑り落ちない雌鹿の足が与えられ、高き所を神が歩ませてくださるのです(19)。

　主よ、「それでも」私が喜んでいられますように。どうか、迷う私を捕まえてください。谷を駆け上がる雌鹿の足を私に与えてください。

12月17日（水）　ゼファニヤ書　第1章
主なる神の前に静まれ。
主の日は近づいているからだ。（7）

預言者ゼファニヤの先祖ヒズキヤとは、ヒゼキヤだと考えられ、この預言者は王の家系の者だと考えられます。彼が活動したのは、当時腐敗甚だしいユダの改革をした「ヨシヤの時代」(1)です。ユダの王ヨシヤにとって、親戚筋に当たるゼファニヤは力強い協力者だったことを物語ります。

第一章は、おそらくはヨシヤの改革の前の腐敗した神殿の様子でしょう。バアル(4)、ミルコム(5)は、異教の偶像の名前で、それらがユダに持ち込まれていました。「異国の服」(8)は、異教の祭服のことです。「敷居を飛び越える」(9)とは、神殿の聖域の規定が冒されていることを言います。そのような神殿に主の日が迫っていると告げられます。

「主は幸いも災いももたらさない」(12)とは、自分に関与し給う生ける神を見失うことです。密かに不信仰を「心の中で言って」います。しかし、秘められた思いも、神が灯をかざし捜されます(12)。神殿は存在しましたが、心の中で神への望みを置かないので、神殿は形ばかりです。けれども、人間の不信仰の心が神の働きを止めることなどできません。主の日は世界をひっくり返す現実の力をもって臨むと告げられています。

主よ、現実に関与し給う神さまを見失うことがないように私をお守りください。

12月18日(木)　ゼファニヤ書　第2章

主を求めよ。／地の苦しむすべての者たち／主の法を行った者たちよ。／義を求め、謙遜を求めよ。(3)

《主の法を行う》とは、主の義を求め、謙遜に生きることだと言われます。こうした神を畏れる謙遜が、主の日に主の怒りからかくまうものだと告げられます。こう言わなくてはならなかったのは､モアブやアンモンの人々からの｢嘲り｣(8, 10)を受け、謙遜を忘れて自分の正義と誇りで報復しそうになっているからです。その栄光を回復してくださるのは神だと知らねばなりません。聞こえてくる嘲りを本当の意味で跳ね返してくださるのは、自らの怒りの報復ではなく、神御自身です。

嘲りを自分たちの誇り(8)で跳ね返したところで高慢(10)になるだけのことです。クシュの誇り散らす様子が「私だけだ、私をおいて誰もいない」(15)と書かれます。こうした高慢は、国同士、民族同士が誇り合い嘲り合い、相互に憎悪を生む結果しか生みません。

そこで神の民に示されるのは、相手の嘲りに嘲り返すことではなく、ひたすら主の法を行うことです。そうした謙遜な歩みの中で、主の正しさが明らかにされます。このことは国同士の関係のみならず､私たちの日常も同様なのです。

主よ、誇り合い嘲り合うことに足がすくわれないように守ってください。あなたが私の誇りを守ってくださると信じます。

12月19日（金）　ゼファニヤ書　第3章

あなたの神である主はあなたのただ中におられ救いをもたらす勇者である。（17）

前章の近隣の民への裁きに続いて、エルサレムに対する裁きが告げられます。「ヨシヤの時代」(1：1)とは、ヨシヤ王による神殿の改革が行われた時代ですが、「呼びかけに耳を傾けず／懲らしめを受け入れなかった。／主に信頼せず、神に近づこうともしなかった」(2)と言われるのを読むと、ヨシュアの徹底的な改革も彼らを神へと立ち帰らせたわけではないことがわかります。「彼らは繰り返し／あらゆる悪事を行った」(7)と言われているとおりです。そして、迫りくるユダと諸王国の滅びは、なおはっきりと見えてきています(8)。

しかし、その滅亡を越えて、イスラエルの回復が語られます(9 節以下)。滅亡によって焼き尽くされるのは、「高慢で思い上がる者」(11)です。残されるのは「貧しい者、弱い者…主の名を逃れ場とする」者たちです(12)。彼らは「草を食む羊のように憩い／彼らを脅かす者はない」(13)という守りの中におかれます。それは「あなたの主である神はあなたのただ中におられ／救いをもたらす勇者」(17)だからです。こうして神の民とは、神によって支え守られる民であることが明らかになってゆくのです。神が恥を誉れに変えてくださるのです(19)。

主よ、救いをもたらす勇者として、今日も確かな守りのうちに憩わせ、導いてくださっていることを心から感謝いたします。

12月20日（土）　ハガイ書　第1章

山に登り、木を切り出して、神殿を建てよ。
私はそれを喜び、栄光を現す――主は言われる。
(8)

　ハガイは、ペルシアによってユダヤ人たちがバビロンから解放され、エルサレム神殿を再建する時期に、ユダヤ人たちに勇気を与えた預言者です。ハガイの託宣開始の「ダレイオス王の治世第二年、第六の月の一日」は、紀元前 520 年でペルシア王のバビロンからの解放宣言からすでに 18 年経過していたとわかります。歴史を記録したエズラ記と照合すれば、帰還後すぐに始まった神殿の再建でしたが、二年ほど土台工事のみ行われ、敵対していた近隣勢力の妨害によりすでに 16 年中断してしまっていました。こうした状況下でのハガイの預言です。

　神殿が廃墟となったまま、人々の生活は始まっていました。けれども、その状況では、豊かさをかき集めても「穴の開いた袋に金を入れるようなもの」(6)と言われます。豊かに備えてくださる方を忘れているからです。神殿で感謝の礼拝を献げ、喜び安堵することが必要なのです。これによってこそ魂の必要は満たされます。

　魂の枯渇は自覚されない場合が多く、放っておけば気づかぬまま空しく走り回って(9)生きてしまうことになります。ハガイはこの隠された渇きを指し示しつつ、神殿建設へと民を奮い立たせるのです。ハガイの名の意味は「主の祭り」です。主への祭りこそ、人生を満たします。

　主よ、この主日、礼拝の喜びを私の人生の支えとします。

12月21日（日）　ハガイ書　第2章

ゼルバベルよ、今こそ強くあれ…大祭司ヨツァダクの子ヨシュアよ、強くあれ。…働け、私はあなたがたと共にいる。(4)

ゼルバベルは、シャルティエルの子と記されていますが、歴代誌上 3：17-19 を見れば彼がユダの第一次捕囚時の王ヨヤキンの子孫であることがわかります。帰還後の復興は、この総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアにかかっていました。彼らが信じなくてはならないのは、「私はあなたがたと共にいる」(4)ことです。エゼキエル書 10：18 で神殿を離れた主の栄光が、今やエルサレムに戻ってきました。かつてユダへの怒りから、まるで敵のようになられた主が今や味方です。しかもそのことは、地上に神殿を建てるという、実際的・物質的なことにおいてもそうだと大胆に信じるべきなのです。

10 節からの託宣では、イスラエルの信仰の弛緩が危惧されています。たしかに神は味方となられたのですが、それは律法で禁じられた汚れに染まることを許す甘さとは異なります。信仰の心を確かにして味方である神を見上げ、神のものとして生き続ける必要があるのです。

20 節からは、再建のために用いられるゼルバベルが神の「印章」(23)とされると言われています。揺るぎない神の約束のしるしとして、彼が与えられているのです。神の誠実が、ユダの滅びの中にも貫かれていたことがここに明らかになっているのです。

主よ、主が共におられることが、私の実生活に関わりあることと信じます。

12月22日（月）　ゼカリヤ書　第1章

主は私に語りかけた御使いに、恵み深い言葉、慰めの言葉で答えられた。（13）

ゼカリヤはハガイと同時代人です。「ダレイオスの治世第二年、第八の月」(1) は、ハガイの預言と時期的に重なっています。厳しい捕囚の後、改めて主は「私に立ち帰れ」(3)と、ゼカリヤを通して呼びかけられます。

ゼカリヤは、赤い馬に乗った騎士の幻を通して預言します。騎士は主の使いに「地上の人々は平穏に暮らしています」(11)と報告します。しかし、平穏は表面だけだというように、ユダの人々は憐れみが施されないまま 70 年も主の憤りのもとに置かれていると御使いが主に訴えます(12)。そこで主は「私は憐れみをもってエルサレムに帰る」(16)と慰めの言葉を告げられ、神の家である神殿が建てられ(16)、エルサレムが再び良いもので満ち溢れると告げられます(17)。真のエルサレムの繁栄は、神によるのです。

これまでの厳しい預言とは異なる、慰めの預言です。時代が、神の救いが現れる時代へと変わったのです。時代は神が作られます。それは私たちの希望です。人間の作る時代を見れば暗澹たる思いになりますが、しかし神は光の時代を必ず備えてくださいます。

主よ、あなたが備えてくださる希望のゆえに、この時代を耐え忍んでいることができますように。

12月23日（火）　ゼカリヤ書　第2章

エルサレムは多くの人と家畜が住む
城壁のない町となる。
私自身がそれを取り囲む火の城壁となる。(8, 9)

第二の幻の「四つの角」(1)は、四つの方角、すなわち世界中を言い表しています。ユダを苦しめた世界です。ところがその四つの角が、四人の職人によって投げ倒され、ユダが守られることが示されます。

第三の幻は、エルサレムを測る「測り縄」(5)によって示される神殿再建の幻です。興味深いのは、神ご自身がその町を取り囲んでくださるので、城壁がないままで町となると言われていることです。もちろん、やがてネヘミヤによって城壁が再建されますが、それに先立つ神の守りがあるのです。城壁建設も必要ですが、城壁と神殿を一気に造る力は今のユダにはありません。しかし、その不完全さの中にこそ、神の「火の城壁」(9) の守りがあると言われています。

10 節以降では、バビロンからの解放が言われます。逃げ帰る場所がエルサレムにきちんと備えられていると示されます。傷ついた心の民に神は、「あなたがたに触れる者は私の目の瞳に触れる者だ」(12)と、神の守りを宣言なさいます。申命記 32：10 で言われていた「主は荒れ野で、獣のほえる不毛の地で彼を見つけ／彼を抱き、いたわり／ご自分の瞳のように守られた」という主の真実は、なお揺るぐことはありません。

主よ、不完全で傷を受けやすい私ですが、今日も主の守りの中にあることを信じます。

12月24日（水）　ゼカリヤ書　第3章

ここにいるのは火の中から取り出された燃えさしではないか。(2)

第４の幻は、大祭司ヨシュアへのサタンの訴えという場面で始まりますが、サタンは実際には訴える言葉を発しません。むしろ主の使いの方がヨシュアの姿を「燃えさし」と言います。燃えさしは、もはや善いことも悪いことも、何もできません。滅びという火の試練を通り抜けたイスラエルには何も残っておらず、衣が汚れても着替えはもうありません。この燃えさしの姿、汚れた衣の姿を自己の真相として言い訳もせずに受け入れてしまえば、サタンはそれ以上訴える言葉を失います。訴えても「そのとおり。」と言うばかりだからです。神の言葉は、そうした自分の底に響きます。御使いは汚れた衣を脱げと言い、晴れ着を着、清いターバンを巻けと言います。神殿を行き来する大祭司の清さは、ただ主ご自身が与えてくださるのです。

幻は、終末の希望を語り始めます。この祭司の民を通して「若枝」(8)であるメシアがやってきます。「石」(9)は礎石で、世界を見渡す「七つの目」があります。世界に広がる主の民としての教会と考えてもよいでしょう。この民に主がご自身の所有であることを示す文字を刻んでくださっています。何も残されていない民が、ただこの主の恵みの業によって招かれるのです。

主よ、燃えさしであり、汚れた衣を着ている私をあなたの恵みの業に委ねます。

12月25日（木）　ゼカリヤ書　第4章

武力によらず、権力によらず
わが霊による――万軍の主は言われる。（6）

金の燭台の幻です。この燭台には、二本のオリーブの木からの管がつながれていて、そこから油を注がれる七枚の灯皿があります。この二本のオリーブの木は、油注がれた二人の人物です（14）。二人は、エルサレム復興のための役目を負う総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアです。この二人が、エルサレムが再び光を灯すために立てられるということを示す幻です。

限界ある人間としての二人が、それでも光を絶やさずにいられるのは、彼らから灯皿に伸びる「管」が絶えず油を注ぐからです。

管を通し注がれるのは、神の任職の油です。「武力によらず、権力によらず／わが霊による」（6）と、ゼルバベルに注がれます。神の霊の油が注がれ、光は絶えることがありません。ゼルバベルは、失敗の証拠である神殿の瓦礫の「大いなる山」の中から「『恵みあれ、恵みあれ』と叫びながら頭石を運び出して来る」（7）と言われます。失敗を乗り越えさせるのは主なる神です。この主の恵みを信じることが、信仰者には許されています。

主よ、あなたの恵みに信頼し、失敗にくじけずに生きることができるように、いつも霊を注いでください。

12月26日（金）　ゼカリヤ書　第5章
記されていることに照らして…(3)

第六の飛んでいる巻物の幻は、律法の普遍性を言います。「全地の面（おもて）に出て行く」(3)とは、律法がイスラエルを越え、世界中に妥当することを言い表し、「呪い」とは律法を無視して生ずる悲惨を言い表しています。そしてこの巻物に「照らして」とは、律法が世界の揺るぎなき物差しだという意味です。照らすものを失えば、混乱が生じます。律法の中でも、特に盗みと偽証の二つが触れられるのは、それらが強者らの搾取につながり、世界の悲惨な現実がそこから生じているからです。

第七の幻は、エファ升の幻です。23 リットルほど入る大きな升です。中に入っている女は「邪悪」(8)と呼ばれます。イスラエルの罪の元凶と考えてよいでしょう。この升に重いふたが投げ被されます。そして、この升を、風をはらんだコウノトリのような翼を持った二人の女が、シンアルの地すなわちバビロンに運び、そこにその邪悪の神殿が造られると言われます。この時代にはすでにバビロンは滅びていますが、その特徴の残虐と混乱が、世界にはなお残ることが言われています。そうした世界の中で、神の民は罪が取り除かれ、自らの道を神の律法に照らして生きていきます。

主よ、自分の悲惨さに気づくたび、あなたの言葉に照らし立ち帰らせてください。

12月27日（土）　ゼカリヤ書　第6章

若枝という名の人がいる。
その人のもとから芽が出
その人は主の宮を建てる。（12）

最後の第八の幻は、一見、第一の幻（1章）の赤や他の色の馬の幻に戻ったかのようですが、第一の幻の馬が全地を見回るためのものであったのに対して、第八の幻の馬は戦車を引いています。これは全地に対しての究極的な勝利を意味しています。特に最後に言われる北に行った馬は（8）、バビロンを表し、そこが滅びたことで主の（怒りの）霊がとどめられたと言っているようです。新しい時代を迎えているのです。

続いて大祭司ヨシュアの戴冠が語られます。神殿の再建に先立つ戴冠です。神殿は、その建物よりも、その中に神の権威を携える人の存在のほうが重要だということを、戴冠は表します。たしかに神殿建立に先立って、モーセがホレブの山で燃える柴の中から神の権威を授かったことがすべての始まりでした。

この神の生命的な働きは、当時建てられようとしていたゼルバベル神殿を超えて、「若枝という名の人」（12）、すなわち来たるべきメシアにまで話は進みます。メシアは建設者であり、王であり、祭司です。真実の神殿を建てるのは、すべてに先立って王冠を頂いているメシア・イエスなのです。

主よ、全地で勝利をなさり、まことの王となってくださっている主のおいでを待ち望みます。

12月28日（日）　ゼカリヤ書　第7章

互いに慈しみ、憐れみ合え。寡婦、孤児、寄留者／貧しい者を虐げてはならない。／互いに悪を心にたくらんではならない。（9，10）

ダレイオス王の第四年とは、八つの幻を見た日付から二年後になります。第五の月の断食を続けるかどうかが問題にされています。第五の月は、エルサレム陥落の月（王下 25:8，9 参照）ですから、それを覚える嘆き（ゼカ 7:5）の断食で、それを七十年（5）続けてきたのです。

それに対し「本当に私のために断食したのか」（5）と、主の問いをゼカリヤは告げます。バビロンでの生活も、結局自分たちのための飲み食いだったし、現在の様子は捕囚以前にエルサレムに住んでいた時と変わらない（7）と言われます。つまり、嘆きは表面的で、真実にその心を裂くことはありません。「心をダイヤモンドのように固くして、万軍の主がその霊により、先の預言者たちを通して送られた律法と言葉を聞き入れなかった」（12）と言われるとおりです。

主が本当にお求めなのは、表面的な形だけの苦行ではなく「真実の裁きを行い／互いに慈しみ、憐れみ合え。寡婦、孤児、寄留者／貧しい者を虐げてはならない。／互いに悪を心にたくらんではならない」（9，10）と言われる愛の律法に心から聴き従うことです。神殿を建てることによるエルサレムの復興は、愛のなさを嘆きつつ愛に生きようとする心の復興から始まるしかないのです。

主よ、つきまとう愛の貧しさを知るからこそ、あなたを呼び求めます。私に愛をください。

12月29日（月）　ゼカリヤ書　第8章

あなたがたと一緒に行かせてほしい。神はあなたがたと共におられる、と我々は聞いたから。(23)

エルサレム回復の明るい預言が語られます。「妬み」(2)は、救いである主の強い御心の表現です。4,5 節が語るかつての戦乱からすれば、もたらされる平和で穏やかな状態は人間には不思議としか言い様がありません。けれどもそれは主の当然の御心を実現したもので、不思議ではないと言われます。7 節以降は、「救い出す…連れて来て…住まわせる」と神の恵みに満ちた行為が語られ、だから「勇気を出せ」(9,13)と語られます。すべては、呪いも死をも覆す救いの神、祝福の神の御力によります。

そうした神の恵みの行為の後に、応答として人間のなすべき事が「互いに真実を語り／あなたがたの門で真実と平和の裁きを行え。互いに心の中で悪をたくらんではならない。／偽りの誓いを求めてはならない」(16,17)と告げられます。そうした人間の善き生き方は、神の恵みへの感謝に満ちた応答であって、救いの条件ではありません。

こうして神の恵みとそれを知る人間の感謝が結ばれた光あふれる民の様子を見て、富国強兵でもなお不幸せな諸国民が、「あなたがたと一緒に行かせてほしい。神はあなたがたと共におられる、と我々は聞いたから」(23)と願います。今の世界と重なります。

主よ、この時代の中で主の民である私たちの歩みが、どうか世界の憧れとなりますように。

12月30日（火）　ゼカリヤ書　第9章

あなたの王があなたのところに来る。…へりくだって、ろばに乗って来る／雌ろばの子、子ろばに乗って。(9)

「知恵に満ちたティルスとシドン」(2)の滅亡を通して、人間の知恵の限界が示されます。小さな島の都ティルスは、知恵を用いた交易によって大変豊かになりました。アッシリアの脅威に対しても知恵を用いて果敢に抵抗し生き延びます。けれども、バビロンの圧倒的な力の前にはその知恵も歯が立たず、とうとう滅んでしまいます。そうしたティルスの滅亡は、近隣の国々を、「一体何をもって生き延びることができるのか」と戦慄させます。これはゼカリヤには過去で、彼は歴史をふり返っています。バビロンによるティスル滅亡という故事から、本当に勝利する支配力とは何かについて、語るのです、知恵でもなく、また、軍事力でもないと。

そこで、イスラエルとユダを救う王が、「あなたの王があなたのところに来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者。へりくだって、ろばに乗って来る、雌ろばの子、子ろばに乗って」(9)と語られます。賢しらな知恵や無慈悲な軍事力の王ではなく、ロバに乗る王です。軍事力の恐怖で相手を黙らせるのは、事態を余計や複雑に絡せる愚かな支配です。主の慈しみに倣う謙遜が平和を招来します。ロバの背の主イエスこそ、平和によってこの世を支配する真の王です(マタ 21:5)。

主よ、武力による平和ではなく、あなたが言われるとおりに平和を求めます。

12月31日（水）　ゼカリヤ書　第10章

私は彼らを憐れむゆえに連れ戻す。／彼らは私が退けなかった者のようになる。(6)

捕囚とそこからの回復をふり返り、ユダとイスラエルの回復が語られます。テラフィム(2)は占い師が神託を求めて使った小さな像ですが、それらが慰めを与えないことを心底知らされました。イスラエルにおける占い禁止の理由は、単なる厳命ではなく、占いは人を本当の意味で慰めることがないからです。占いが夢想させるよい将来は、苦しい現実に出遭えばたちまち打ち砕かれます。牧者を知らずさまようばかりで、苦しみを歩みきることができません。

ユダヤ人たちは、苦しみの中で自分たちの身に刻むように、「ユダの家を強め／ヨセフの家を救う」のは、神であることを知らされます(6)。「主が彼らと共におられるから」(5)が慰めの正体です。ここから、踊るような彼らの喜びの様子が描かれます。「彼らは私が退けなかった者のようになる」と、神の御心が自分たちに向いていることを知って喜びます。私たちの喜びの中心は、ここにあります。本当はどんな苦しみの中にあっても、私たちをご自身のものとして、ぐっとつかんでくださっている主がおられるのです。慰めと喜びは、ここに湧くのです。

主よ、迎える新しい年も、あなたによって私を強め、あなたの名によって歩んでいることができますように(12)。

© 高橋　誠